中国の若い同志からの手紙

チヨイ・ハクキン

私はリベルテールを貴方から直接受取ってはいませんが、貴誌の定期的読者です。というのはパリの第七大学、アジアーオリエント学部の図書館員、シユス君が毎月受取る二冊のうち一部を呉れるのです。

そう、定期読者ですが、多分必ずしもよく〃理解〃している者とはいえないでしょう。私は香港の中国大学で勉学中に、一年間日本語の二時間コースで学びましたが八年前に習ったことを、すっかりとはいえないが、大部分忘れてしまったのです。しかし言語の障害はあるにしても、貴誌は注意深く読んでいます。私はアナーキストなので、日本で何が起きているか大いに興味を持っているのです。事実、私の確信によれば、暫くは実際運動はできないにしても、少くとも情報に関する限りでも、アジアのアナーキスト達の間に何らかの共働があるべきだと、いつも思っています。

一九四九年以前の中国のアナーキスト達は、日本の反体制運動者達から、直接の連絡やら出版物を通して、多くのことを学びました。ここで中国のアナーキスト達と幸徳、大杉、石川、それに山鹿泰治等との交流を想いだす必要はないぐらいでしょう。けど不幸なことに、今日では〈それは昔のこと…〉としか言えないのは残念です。

三年まえ、パリで私は数名の日本人同志達と逢いました。京都のミキ君は不定形社の人でしたが、彼とは幾晩も意見と思想の交換をしました。それから香港と日本の協調を語りました。私が思うのでは、一九七四年六月、彼は帰国して、日本のアナーキスト連盟の再建に参加している筈です。以来、残念なことに連絡が絶えていますし、どうなったか判りません。ですからあの時の私達のプロジェクトも頓座したのです。

私が日本の同志達との交流を語ったからと言って、香港に何らかの実体のある運動があるという訳ではありません。私の同志だって六・七名しかいず、週刊誌を出している70年代グループも残念ながら、分裂して（特にトロッキストとの仲違いです）メンバーは減りました。ですから今では活動停止の状態です。ガス・モック君やフアン君のやっている〈マイナス8〉はアナーキスト誌とはいっていないがリバータリアンの傾向誌です。それに〈地下報〉は私達が三年間パリで組織した中国人のリバータリアン・コミュンニストが70年代グループと共働して、香港で月刊誌を出したのですが、主に財政的理由で一回だけ、半年前に出版しました。その他の理由、私達

の無経験と財政の不如意などで会員は少いです。これに加え、私達は労働者階級から全く切り離されています。これに就てはトロッキストと比べものにもなりません。彼等は49年以来、香港に居住する古いトロッキスト達の支援を受け、はるかに数が多い。私が述べているのは泣言ではなく、私達の主体的な弱さを自己批判しているのです。この弱さは、香港と中国大陸の客観状況を前にして、いわゆる受身の立場に私達を追込んでいます。私の言う意味は、毛のイデオロギーとある種の表面的な愛国的感情の混じったものが、若い人びとの間で優勢だーということです。むろんこれとて、十年前の〈脱政治〉に比べれば、民衆の間に政治意識の進歩がみられるのは否定できません。しかし中国共産党とのそうした一体化は社会主義のある範囲のものを受入れるにとどまり、あの〈愛国的〉民衆は、社会主義のしきいで停ってしまうことになったのです。この手紙でその状況を詳細に分析したり、理解の行届いたものにするのは不可能ですが、その結果としては、民衆がどんな批判も受入れなくなり、兎角中国共産党の政治体制が社会主義で、正当化されるものであり、批判はすべて〈反中国、反党、反人民的である〉または〈社会帝国主義の走狗〉として片づけられるようになったのです！

ところで〈四人組〉の失脚によって、いわゆる〈自由化〉が唱えられていますが、これは幻滅と、むしろ盲目性を強化する以外の何ものでもなく、むしろ反動派が北京体制に貢献するようになるでしょう。ですから私達には今こそ、私達の視点と批判を加える必要が強まるのであって、貴方がたの理論的忠告や情報が貴重になるのです。

今夏は香港へ帰るつもりです。（中略）でも帰る前に私が二年前に始めた中国無政府主義の博士論文を仕上げなければなりません。私の資料源は限られています。山鹿泰治の文献コレクションには貴重なものがあると思うのですが、日本への旅行の可能性がありませんし、米国にある資料の所在は知っていますが、行けそうもありません。ですから香港とヨーロッパにある資料でやらざるを得ないのです。

貴誌vol Ⅵ、No.1でオーガスチン・S・三浦さんが玉川信明著〈中国アナキズムの影〉につき言及していました。この本は私の研究にとって貴重な資料が含まれていますので、私のために購入していたゞければ幸いです。本の価格をできるだけ早く教えて下さい。そうすれば送金致します。その他、別な資料（本、論文等）があればご教示下さい。

私は五年前フランス政府の給費性としてパリへ来ました。二年以来、生活のため、二つの職につきましたので論文を書く時間が少い。でも夜昼となくやっています。フランス語で書きますが、興味がおありなら、一部差上げましょう。むろん出来てからのことですよ。

長い文面で失礼しました。でも初めての連絡なので、卒直に事柄を説明したかったのです。ご理解の上、お許し下さい。連絡をお待ちします。友愛をもってご挨拶致します。

（一九七七年四月十二日）

〔この手紙の返事は、既にリベルテール No.5 で〈中国の若い同志へ〉として発言しました。併読して下さい。なお玉川信明さんの本もチョイ君に発送しました。山鹿さんのコレクションに付き、またその他中国アナーキズム運動の文献資料でお気づきや心当りのある方は、リベルテール社気付、はしもとまでお知らせ下さい。本人へ連絡します。　訳・はしもと〕

〝リベルテール〟に投稿しよう!!

主張、批判、時事感想、イラストなど、何んでも送ってみようよ、読者の広場を作ろうよ!

中国無政府主義試論 (2)

1. 劉師復

資料 1 （つづき）

「顔面の傷が治癒する前に、いつものように李紀堂と一緒に青山（チンシャン）へ行き、投弾方法を試験した。初め、恵州と潮州の両地で軍事行動が起きたら同時に実行に着手することとしたが、顔面の傷が未だ癒えず、四月下旬まで実施を延ばした。そこで広州で準備のための場所を求めたが、香港の機関部からも同志、張谷山、張伯喬、朱執信等が派遣され、この進行を支援することになった。張谷山は字（あざな）を如川といい、五華県人で、梅県では教員を務め革命を鼓吹するのに熱心だったが、当時、租定市内の古い倉（くら）の建物のたち並んだ通りの鳳翔書院に住み、留学生の宿泊所を設け、運動の為には軍事と学問の両界をつなぐ役割を果していた。張樹枏（チャンシュナン）は字を伯喬（ボチャオ）といい、番禺（フアン）（広東省の県名）の人で、胡漢民、汪精衛、朱執信等と共に東京の法政大学附属法政速成科に学んだ。帰国後は香港と広東を往来し、党の人びととの連絡にあたり、最も力を尽した。その家は高い物見台の前が張大夫の邸宅だったから、党の人びとはこれを会議所に活用した。次ぎ

に張君はこの事で香港に来た。思復と実行方法を協議した。この協議に参加したのは私と胡漢民、李紀堂、劉樾杭等であった。決議したのは、海軍長官李準は汕頭（シャントウ）（広東省の一開港場の名前）から凱施して間もないので、直ちにこれを誅して示威すべしというのだった。そこで、張谷山に鳳翔書院の近くで、閑静な場所を探す役を担当させ、実行機関の出発拠点とすることにした。張伯喬には李準が毎日通る道筋を偵察させ、実行の機会をうかがわせた。協議の後、張君は四月二十六日、広州へ引返した。思復は張伯喬から報告を受け、李準は毎月月初めの二日の朝早く、総督署へ参謁し、この時、必ず馬を疾駆させる、これらは大体街の噂でもあった。張谷山からの報告はなかったが、二十九日朝早く、車に乗って省に到着し、張谷山に就いて鳳翔書院の中の静かな一室を居所と定め、思復は張谷山と一緒に総督署と海軍署の二ヶ所を訪ね、その交通道路を詳細に調べ、実行を計った。また張伯喬の居所は高い物見台の前にあったから、李準が往来するのを見失うことはなく、彼の耳目から遁れるのは出来ないことだった。約束では五月一日の早朝、李準が総督署に入るのが見えたら、暗号で情報を鳳翔書院に入れ、思復はひそかに伺い、李準を道で狙撃することにした。思いもよらず、張伯喬は一日の早朝、李準が総督署に入るのを目撃したので、急いで鳳翔書院に連絡すると思復の準備がまだ整わないうちに、李準は総督署からでて海軍署へ疾駆し、思復はそれでもまだ外へ出られず、これで機会を失ったことを知り、捲土重来を期し、又準備に若干の日時がかかることになった。

思復が用いた炸薬と鉄弾はすべて香港製で、別々に広州へ携帯してもってきた。鉄弾は螺旋式になっていて、使用時には薬粉と砂粒を混合し、鉄製外殻を配置する。その日の朝、思復はいくらか遅く起き、また炸薬と鉄弾殻の配置も完全でなかった。（訳者註・この記述にそれとなく思復に対する批難の口吻があるのは、先述の彼の行動におけるもたもたぶりの記述と一致するようだ。）最初、炸弾のための一式をととのえ、第二の装具をととのえる時、鉄殻のうづ巻きみぞに、僅かだが、炸薬が残っていて、たまたま摩擦したため、忽ち暴発した。その轟音（ごうおん）は雷のようであった。思復は顔面と左手下部に爆傷を受け、五本の指はことごとく廃疾した。張谷山は音を聞きつけ、駈けつけて思復を見ると、彼（思復）は直立したまゝ頭部と手足から鮮血がほとばしり手はぶらさがり、声もなかった。直ちに近隣の図強医院に走り、医師を求め傷の手当を頼んだ。それから書院へ帰ってきて、負傷者が床上に横になっているのをみたが

彼（思復）の精神力は清明であった。すみやかに問答をした。医師はすぐ来るだろう。重要な物品は、すぐ配置換えをして、軍警によって捜査され捕獲されないようにすべきだ。その時、ベッドには毛布がかけてあり、その角に既に完成した炸弾一個があった。思復は直ちにそれを室外の便所へ移すように命じた。張谷山が訊ねた。「爆発する恐れはないだろうか？」思復が答えた。「硬いものにぶつければ爆発する。そっと小便つぼまで持って行って、ゆっくり放下すれば破裂しない。」張谷山は言はれた通りにした。間もなく同宿の学生や労働者が爆音を聞きつけ、大勢集った。附近で立番をしていた警官も来た。伍漢持はすぐ医学生の陳逸川、周演明、黄又蘆等数名をともない薬品を携帯して匆々に入って来た。負傷者が満身血だらけなのを見て驚愕した。初めは狙撃されたのだと思い、まさか炸弾の爆発によるものとは疑はなかった。思復は三水の人李徳山と名乗った。仲間の医士がどうして負傷したのか訊ねたが、目瞑して答えなかった。そばにいた警官が警察署に通報して調査しなければならないと言った。張谷山は事の重大さに気付き、後事を頼んで外出し、豪賢街にある朱執信の宅へ行って報告し、次ぎに服を換え、ひげを剃って、仏山の西の本へ廻り道をして香港へ出た。図強医院の医者陳逸川は、負傷者を診察した際、床の藤籠の中に鉄弾が二個あるのをみて、革命党員の所業だと知った。またベッドの下に手紙が数通あったので、すぐ服のポケットにしまった。しばらく紛擾して、警官は鉄弾を発見し、やがて負傷者が革命党員であると疑いをもつようになった。巡回警官の龔心湛という者が、しばらくして、負傷者を鞏美医院につぎこむよう命じた。傷の手当を待って訊問することにした。思復が入院すると、フランス人の医者は、傷の勢力が身体全部に及ぶのを恐れ、遂に左手下部をすっかり切除した。二日目、張谷山と朱執信は前後して香港に来て、中国日報に変事を通報した。私（馮自由のこと）と胡漢氏、李紀堂は救援を協議した。翌日、私は男女党員数名を広東に派遣し、鞏美医院に連絡して待機させた。医院の後門の水道を利用して思復を連れ出そうとの計画だった。数日見張ったが警吏の警備が厳しく中止した。広東の警察は先づ張谷山を捕縛したが、海軍長官李準は先きの事件の目ろみが自分を目標にしていたのを風聞で知ると厳重に究明するよう主張した。張谷山を捕えても法律的には効果がなかったので、やがて図強医学校に関係ありと認め、軍警を特派して宿舎を探させたが得るところがなかった。僅かに米国の雲高華の華英日報記者、崔通約という人が校長の伍漢持に宛てた手紙があった。

その文面に「今日革命を謀らんと欲すれば、革命思想の普及を人心に及ぼさずんばあらず」の一語が書かれていて、これで革命党員であるとの証拠になり、にわかに五漢寺を拘留した。彼が法政学堂で勉強していた時の校長夏同龢と教員の杜之秩がこれを聞いて、連名で保釈を願い出たので、彼は間もなく釈放された。

思復の傷が治って退院すると、清朝の官吏は何度も訊問したが、いつも自分は三水の人、李徳山であり、化学の試験をしていて負傷したものであるとして、本当の氏名を言はなかった。その後、招いた妻の丁湘田が監獄へ来て彼の看病をするようになり、広東の各紙が相ついで掲載したので、世人は始めて、李徳山というのは劉思復だと知るようになり、思復もまた広州の官吏の訊問には氏名を隠さなかった。広州の官吏は再三再四審問したが証拠がなく、遂に香山県の原籍地で監禁することにした。これによって思復は香山県城内の監獄に二年間つながれた。

一九〇九年の夏、陳景華がタイ国から香港へ帰ってきた。私は陳が香山県の豪紳（権勢家）江孔殷と旧知であるのを知ったから、彼に思復の救援を頼んだ。江孔殷は陳の付託により、当局を説いたので、思復は出獄した。思復が香港に来ると、同盟会の同志達は跑馬地愉園で歓迎会を催した。思復は香港でひっそり暮すこと三年専らフランスのパリで唱導されていた「新世紀」の無政府主義を研究し、極めて精進した。一九一一年八月、武昌で革命軍が蜂起すると、広州の党員も速やかに兵を集めて呼応した。思復は莫紀彭、林君復等と運動して香山前山鎮に新軍を向け、これを香軍と称して、広州へ進撃した。これを聞いた張鳴岐が遁走したので、胡漢民が都督（省都の長官）になった。思復は兵権を放棄し、政事を語らず、杭州西湖の白雲庵に数ヶ月隠居した。（訳者註、原文では胡漢民己任都督、遂放棄兵権、不問政事、隠居於杭州西湖白雲菴者数月、となっている。これだと思復は、胡漢民という党の上級者が都督になったので、それが不満で軍を進めることをやめ、政治にたづさわるのをやめ隠居したことになる!!しかしこれはいわゆる政界から退く契機になったとしても深い意味があるので後述する。）

また昔の同志が権利の主張に熱中するのをみて、彼（思復のこと）は無政府学説の宣伝をしようと発憤し、功名は弊履のごとく捨てるようにとすゝめた。初めに晦鳴学社を創設し各種の宣伝文書を出版した。次いで莫紀彭、林直勉達と広州東園に心社を創設し、十二条の約定をきめた。一、肉を食べない。二、酒を飲まない。三、アヘンを吸はない。四、下僕を使はない。五、縁組をしない

（訳者註、師復は自由恋愛論者で、当時中国では親同志のきめた縁組が盛んで幼な妻（夫）が普通だった。彼はこれに反対したのである。）六、族姓を名乗らない。七、官吏にならない。八、轎（チャオ）（輿）や人力車に乗らない。九、議員にならない。十、政党に入らない。十一、陸海軍人にならない。十二、宗教を奉じない。

すべて社員は一律にこれを守らなければならなかった。民国二年（一九一三年）八月、竜済光が広州にやって来て、晦鳴学社を閉鎖させた。思復はそこで上海に居を移し、雑誌「民声」を編集・印刷して、無政府主義と世界語（エスペラント語）を鼓吹し、力の限り尽した。民国四年（一九一五年）三月疲労が重って肺病になり、病院で死亡、時に三十一才であった。民声社の同志達は西湖の烟霞洞に特に墓地を設けた。以前からの心社の信徒達はこれによって、風に流され雲が散るようにちらばって二度とあの十二の戒律を有効にする者はなかった。」

馮自由著「革命逸史」第二集〈心社創作人劉思復〉より、台湾商務印書館、民国六十年九月台二版に拠る。

一波万波

☆日頃はご無沙汰。ゆるして欲しい。萩原氏の「Aの小辞典」によると、官庁関係の調査だが、大阪、中国方面の団体の個々の所属が大分違っているので、今、倉敷方面を調べに巡っている。ほとんど故人でむつかしい。それより三鷹市の宮崎晃君が四月一二日心不全で死んだ事が惜しまれる。彼とは長い交友関係だった。八木秋子などがよく知っている。なおドメニコ・タリッツオの「アナルキア」が本日付（4/25日）朝日新聞の「海外文化」欄に出ている。仏文らしいが読みたい。リベルテールに紹介を。（平井貞二さんより）

☆いつもどうもありがとうございます。

そちらは皆さんお変りございませんか。

こちらもやっと陽射しは春らしくなって来ましたが、まだまだ風が冷たくて、本格的な春にはなってくれません。

3月31日で職業訓練も無事終了し、国家試験の方も全部終りました。電話通と2通、3通の予備は合格致しましたが、3通の本試験の方、発表が来月の中旬なので、結果が未だ分りません。多分大丈夫だと思いますが。試

験も終ったことですので、また、仏・西・朝語の学習にとりかかろうと思っていますが、出所後、受ける予定の上級の通信士の資格勉強もあり、なかなか進みそうもありません。

では皆さん　お元気で　4/25日（北海道・清水君より）

海外だより

☆ムーレイ夫妻（Noel and Marie Murray　）の救援はアムネスティ、W・R・I（関西）等で継続されているが、次ぎの記事をみたのでお知らしよう。（オープンロード誌）

二人のアナーキストを捕えた時、アイルランドの警官は言った。〈お前達は死んだんだ〉それは1975年10月ダブリン市での出来事だった。9ヶ月後最高裁は死刑を宣告した。以来ムーレイ夫妻は、死の影の中で生活している。彼等は政治的配慮による裁判で、それには陪審員の出席もなく、拷問による自白をきめ手としたものである。現在、苦しい幾月かと国際的連帯のおかげで、夫妻は幾らか報われつつある。12月の半ば最高裁は世論と自らの犯した不正によって、死刑の変更を迫られているのだ。…ムーレイ夫妻の拘留は1975年9月11日に始まった。その日ダブリン郊外のアイルランド銀行支店で二、〇〇〇　ドル強奪された。強盗は自動車で遁げ、非番の警官一人が追跡したが、発砲されることもなく、附近の公園まで追いつめた。ところがそこに彼の射殺死体が発見されたのだ。目撃者は強盗を確認した訳でもなく供述も矛盾だらけだ。にもかかはらず当局は犯罪者はアナーキストだと公表した。沢山な賞金がかけられ、9月23日、名前の判っているすべてのアナーキストと入獄中のアナーキストの親類縁者を急襲した。二〇〇ヶ所の捜査が行われ、審問中には酷い仕打ちもやられた。ピース・ニュースによると、ムーレイ夫妻と一緒に告発されたローナンステンソンは生来〈暴力は何によらず大嫌い〉だったそうだが、警察による暴行を受け、山中で射殺されたと言う。ー夫妻は1975年10月9日に逮捕され17時間拷問を受けた。ノエルの方は殴られ、逆さ釣りにされ頭は便器につけられた。妻のマリーは夫が死んだものと思い、拷問をやめさせようと思い〈自白〉した。ノエルの方も拷問が続くので供述したのである。そこでこれらの自白が被告の犯罪を立証するきめ手に使われている。…ノエルはベトナム反戦の有力な組織者の一人であり、マリーはゲール語を話す地域で市民権運動に参加していた。また夫妻はニューアースコレクティヴの会員でもあって、1974年はこのグループの一つの会員がスペイ

ンのアナーキスト、プイグアンティッチ処刑に抗議して火えんびん闘争をしたとして告発されている。…ダブリンとその他のアイルランド諸都市では救援委員会ができ3,000人のデモ行進が行われた。ドイツ・アイルランド連帯のキャンペーンでは15,000名の署名が集まりハインリッヒ・ボール、サルトル、エルンスト・ブロッホも加わっている。行動はオーストラリア、フランス、日本、イタリア、オランダ、スエーデンで実施され、スペインでは非合法のCNTのデモがアイルランド大使館に向けてかけられ、マドリードで13名が逮捕された。ムーレイ救援会へ詳細を訊ねられたい。

155 Church Road
Celbridge, County Kildare
Republic of Ireland

☆スペインのアナーキズムは
雨あがりのキノコのように群生している

「労働総連合（CNT）がフランコ統治後のジュアンカルロスの治政下で復活しつつある。勿論、非合法ではあるが、活動を開始したCNTはカタロニア、アストリアス、バスク地方、マドリード地区、アラゴン、アンダルシア等で直接行動方式でストを打った。バルセロナは伝統的にスペインアナーキズムの中心地だが、労働者階級は今でもアナーキズムである。電話、輸送、センイ労組はCNTで、銀行、事務労組は社会党系のUGTだ。が今度は共働したし、デパートの従業員ー女性達ーも初めてCNTのユニオンを作った。バルセロナ全市に赤と黒のCNTのポスターが貼出され、最近帰国した老年の活動家は〈バルセロナは今だにわし等の都市だ〉と言った。彼が出席したCNTの集会では300〜400名集り、その大部分は30才前後だったと言う。…スペイン各地には地区連合がある。カタロニアでは27の地区と

地域連合が、ヴァレンシアでは18、マドリードでは15の連合だ、去年の秋、マタロで開かれた時、スタジアムは7,000人の出席者で満席だった。大衆集会では自然にスペインアナーキストの歌〈民衆の子等〉〈バリケードへ〉が合唱された。11月2日はノエル夫妻救援のデモに数千人が参加し、警察は13名を不当逮捕した。…労働者の交渉では一週40時間労働、60才停年、社会保障費は会社持ち、全員に一年一ヶ月の有給休暇、賃上げ等の要求が出され、また熟練労働者と未熟練労働者の共闘によってエリート主義排撃が合意された。（組合は一つ…がCNTの原則である）…スペイン共産党やその他の左翼と異り、CNTはカルロス政権に協力しないことにしている。それは〈名誉ある時を経た労働者階級は社会革命に向けて進む〉のであり、〈権力の背後には反動の軍隊が巣喰っている〉からである。CNTは労働大臣マーターゴロスティザーガーから〈新〉労働戦線への参加を求められたが、次ぎの理由で拒絶した。

・未だに非政府的な労働組織は非合法である。共産党だけがファシスト組合の維持を希望しているが、これはそうした諸組合で労働者が出す組合費で管理し、CNTやUGTのような自由で独立した組合を締出すためである。

・CNTは社主の提案するインフレのための賃金低下という〈社会契約〉を拒否する。

・またCNTはリベラルな民主主義の導入には反対しない。それはその方向でその発展を支持するからである。

・すべて諸他の労働者組織は政党の道具にしか過ぎない。CNTは労働者の利益と要求のための闘いに向けて働く、独立した労働者階級運動を継続する。（O・P誌）

〔われわれも新生CNTの推移を見守り、声援を送ろう〕

野火

（江藤・編）

台湾、在日台湾人問題に関心を！

▽在日台湾人、林景明氏は、「台湾人の自由意志による国籍選択＝自決権」を主張し、国に日本国籍の確認を求めて争っていたが、四月二七日、東京地裁は林氏の訴えを全面的に退ける判決を下した。判決は国の主張を全く受け入れたもので、台湾支配五十年に日本がどう責任をとるのか、というような林氏が提出した本質的に重要な問題を無視し、「国籍選択権は国際慣習法として確立していない」、現在台湾人の国籍は日本の台湾支配がなかったものとして考えればよいのだ、などの言いのがれ、

詭弁を弄したものである。今回の判決でわかったことは軍は力の弱い者に対してはどんな不当なことでも押しつけてくるということである。林氏は高裁、最高裁まで争う決意である。今運動の立て直しが図られている。毎月第三日曜（六月は二六日）「ユネスコ東京」にて判決文の学習会が開かれている。林景明氏を囲む会（東京都目黒区下目黒5－34－16原方、☎793－四〇一六）。

▽韓国ＣＩＡの日本での暗躍については最近マスコミでもわずかながら報道されるようになったが、台湾国民党特務（ＫＣＩＡ）がいかに在日台湾人や留学生の思想・行動を監視し、圧迫しているか、については一般にはほとんど知られなかった。現在、京都地裁でたたかわれている「連・林パスポート取り消し訴訟」は、台湾人留学生の連根藤、林登達（故人）両氏が、両氏の反国府的行動（国旗をひきちぎるという）に対する「パスポート取り消し」の無効性を主張しているもので、同時に、日本における特務の暗躍を告発しようというものである。五月二五日に第三回目の連氏の最後の本人証言が行われる。「連・林裁判報告」ニュースおよび資料は、「連・林裁判を傍聴する会」（豊中南郵便局私書箱8号）へ。

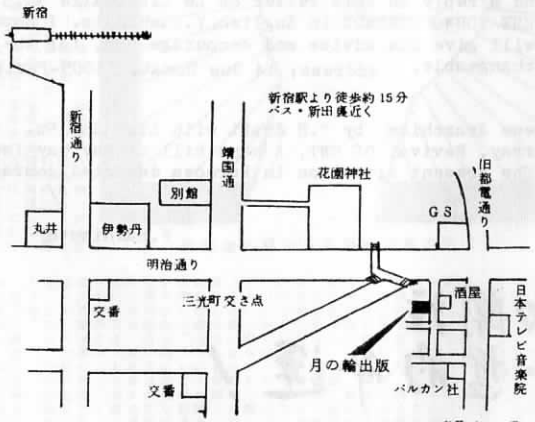
▽「米中接近、日中国交のなかで、台湾問題が右に左にピンポン球のように軽くあしらわれているが、ここには一六〇〇万の生身の人間が生き続けているのだ。わが国の世論は台湾人民の実情や願望に対して、あまりにも非情で黙殺的でさえある。孤立無援のなかで人間性を求めて戦っている人びとの姿にもっと日本人は目を移すべきであろう」というアムネスティ日本支部副理事長の川久保公夫氏の訴え（「台湾の政治犯に救援の手を」「論壇」『朝日新聞』七六年十一月二八日）に応えて、台湾問題をとりあげる運動がすこしづつ起ってきている。

「日本は半世紀もの間、台湾を植民地支配の下においたあげく、あの戦争の渦中に巻き込み多大の人命と資源・財産をないがしろにしてきました。ところが戦後その責任はほとんどあいまいなままに、貿易関係や企業進出など緊密な経済関係が復活し、その状況は、日本国交によって公的な国交が絶えた後も変わってはいません。さらに最近では、年間六〇万にのぼる日本人旅行者が観光・遊楽の地として台湾を訪れ、その無軌道な行動は重大な人権問題を引き起しています。しかし一見、経済的に繁栄する平和な観光地として私たちの眼に映るこの島の中に、実は軍事独裁政権による比類のない恐怖政治と苛酷な人権抑圧の実態が隠されているのです。蔣経国政権は、戦前より島内に住む大多数の台湾人民の政治的・社会的・経済的権利を著しく制限し、徹底した言論統制を行っています。…（二八年間も続く戒厳令）…私たちは、いかなる政治運動に加担するものでもなく、いかなる国家の国益を代弁するものでもありません。しかし、いかなる政治問題も、当事者の住民の基本的人権の保障と、それに基づく自由な言論や運動の展開がなければ、絶対に正しい解決はあり得ないと信ずるものです。私たちは、まさに政治的な激動を迎えようとする時に、過去・現在にわたって深いつながりを持ち、また重大な責任を残しているかっての「同胞」の人権状況に深い関心を寄せることこそ、真の意味での日台友好をめざす道であると考えます。」『台湾人民の人権回復と政治犯救援の訴え』（ニュース、№1）「台湾の人権を擁護する国際委員会」（大阪市北区堂島上3－29聖書館ビル内アムネスティ関西グループ気付）

なお、東京でも、ユネスコ東京、林景明氏を囲む会、人権を考えるエスペランティストの会などを中心に「台湾の政治犯を救う会・東京連絡会議」の結成が六月下旬をめどに準備されている。

★リベルテール・サロン★

毎週火曜、午後六時半より九時（祭日、ストロ中止）誰でも参加可です。前と同じようにおしゃべり会ですが、討論、提案などどんどん持ってきて話して下さい。



1977年5月1日発行　黒　連　第8号

黒連

労働運動の質的転換を

メーデーの連帯を労働者の力へ！
経営者・管理職の存在を断じて認めず、
「自主管理」へ向けて準備を！！

今年の春闘は、労働ー資本、両者いたみ分けで、労働側はまぬがれたと新聞はさかんに労働側の善戦ぶりを伝えている。しかし、今年は辛じて物価上昇率に相当する賃上げを確保できたと喜んでいる労働者はいないであろう。

われわれは物価上昇率に見合う賃上げを獲得する為四苦八苦している労働運動の現状に多くの問題を感じる。まず労働者の主要関心事たる「生活防衛」を問題にしよう。せめて生活をおくる権利を要求するため打ち出された「生活向上」のスローガンが「生活防衛」もスローガンとしてはつまり「生活向上」のようにしてただ生存のための「生活防衛」へと転倒して行ったか、その経移はここでは問わない。たゞ結果としてはだ「生活向上」の「生活防衛」も大きい。しかしその裏で失ったものがどれほど大きいか、身体をすり減らし精神をすり減らして働いた挙句に、資本家から与えられたのは雀の涙ほどの施しでしかない。わたしたちはそれでもそのわずかな生活向上の賃をうひきかえにやっと人間らしきものを手に入れたと思ったのも束の間、今度は不況を口実に首切りを含む合理化攻勢が資本の側から一方的にかけられたわけだ。全く馬かをみるのはいつも底辺で生活する労働者である。賃上げか首切りかを迫る資本家側の強硬な洞喝のまえに、両手を差し出しておすそわけを受れば、それで事が済んだ高度成長時代の労働組合は屈する他はなかった。いまや人間らしい生活は問題外である。できるだけいまの暮らしの水準を維持するに足る賃上げを、というのが情けない話であるが、ここ二、三年の春闘の闘争目標なのである。そして、物価上昇率を判断の基準にして総資本対総労働の賃上げをめぐる「階級戦」の勝敗が論じられてきた。だが一体物価上昇率とは何ものなのか。政府の一機関が労働者の生活の実情を無視して、「客観性」を看板に数値をひねり出しただけのものではないか。むしろわたしたちの身近な生活感覚からすれば、公称の物価上昇率よりも二倍も三倍も物価が上昇していることを肌で感じるはずである。かくてわたしたちの生活はますます確実に困窮し、労働者は誰れでもこの社会では生活防衛と裏腹に生活の墓掘り人たらざるをえないのである。

労働者の解放は労働者自身の手で!!

こうした労働者をとりまく状況に抗して、残念ながら労働者の主体的運動としての労働運動は、いまだ高度成長時代に培われてきた賃上げ主義を克服しえていない。状況が決定的に質的転換をしたのに、現実の労働運動は旧態依然たる姿をさらけ出している。それでは生産性向上・合理化から首切り・合理化攻撃に歩を転じてきた資本側の攻勢に反撃を加えるは至難の技である。何故なら、首切りとか失業という現象は資本主義の本質に根ざすものであり、この社会で労働者が生きるか死ぬかの生存の問題として提起される以上、ひとえに労働運動の存在理由が問われるのは必死だからである。

労働運動は質的転換を図らなければならない。第一に悉ゞ首切り攻撃に対して十分な戦斗力をもちえなければならない。それにはまず、賃上げ主義への志向を断ち切る必要がある。賃上げによってはその場しのぎの生活維持はできても、何ら根本的な解決にならないことを肝に銘ずべきである。そして個々人にかけられる攻撃を自分の問題としてとらえ、自分の頭で考え、自分の方から同じ労働者仲間と結合し、団結しなければならない。

だが戦斗力が備わっても十分ではない。労働運動の新しい意味付けを自らの運動から見出さなければならない。わたしたちはその一つの例を知っている。ソランスのプランソンという都市でもうう数年も前から労働組合による企業の自主管理が行なわれてきた。労働者自らが生産を管理し、自分達の生活を本当に自分達の手にとり戻すことに一時的であれ成功した。テレビの報道によると、朝仕事にとりかかる前に集会を持ち、その日その日の仕事の配分や自分の労働分の担について自主的に決め、資本家や企業主がいなくても労働者だけでちゃんと企業を動かす能力があることを内外に示した。こうした労働者の自管理が労働運動の思想と化し、この資本主義社会にあって全般的な自主管理へと突き進んだら、これは一つの社会革命でなくして何であろうか。

賃上げ路線に包摂された日本労働運動を鎖から解放し、自らを資本主義の軛から解き放つか否かの岐路に間違いなくさしかかっているのだ。いざ聞わん！

In this issue of Le Libertaire ---------

Editor's view of Augustin S. Miura----------1

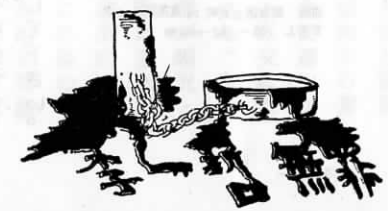
He has dealt with a trouble at Narita New Air Port occured early of this month (May). During thid collinsion i.e. between the peasants occuppied the spot supported by young radicals with various shades of radicalism and the police men, a young man named Mr. Higashiyama enga ging in the work of medical treatment got a serious wound with a tear gas bullet on his rear head, after several days he was dead. two or t three day s later, this time some young radicals attacked a police stop with molotov cocktails and burned down it. A chief officer of police some 30 y ears of his age was dead with a scar of a burn. This series of event was, in its own sense, caused with irritation to open the air port by the government. Comrade Miura urges to cease such vain struggle, but he also support the stand of young radicals.

A UTO-A GE, contributed article by Ichiju Daimon ----------2

He fortells the coming of auto-age and admits a prediction of P. Kropotkin who advocated a social cost charged by the members of a society. So Mr. Daimon holds an opinion that the ownwers of auto shall pay and charge with air pollution, while the price of an auto shall be added with this social cost beforehand.

A LETTER FROM A CHINESE COMRADE by CHOI Hak-kin

A Japanese version of a letter written in English from comrade Choi who is living and studying at Paris now. He has offered solidarity between Chinese anarchists and us. He has commented the situation of our cause at Hong Kong and thus declared "Now, with the downfall of the "group of 4" and the present policy of so-called "Liberalisation", the illusion or rather the blindfoldedness has further reinforced, and even the reactionaries have started ~~ever-a-stronger-~~ to pay tribute to the Peking regime, We need now more than ever a stronger organ to express our view and criticism and your theoritical advice and information will be most precious."etc.
The readers may find a reply to this letter on Le Libertaire No.5 entitled A LETTER TO A CHINESE YOUNG COMRADE in English, Y.Hashimoto. I hope the comrades overseas will give him advice and encourage him, for the situation in China is quite changeable. Address; 14 Rue Domat, 75005-Paris

OTHERS
An essay on Ch-inese Anarchism by Y.H dealt with Liue Shi Fu, Newsof comrades Murray, Revival Of CNT, A hand bill of May day issued by Black Federation, The present situation in Formosa depicted by comrade Eto.

Y.Hashimoto